

---

# CULTURE-HAMMER

エグゼ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

CULTURE - HAMMER

### 【Nコード】

N0215F

### 【作者名】

エグゼ

### 【あらすじ】

異星人襲来、人類は終わり無き戦争に身を投じることになる。そんな世界で生きる一人の青年と兵器のシステムとして存在する少女が出会った時、カルチャーハンマー、人類の新たな歴史が始まる。何のために戦い生きるのか。人々の戦いと日常を書くロボットアクション小説。

## 第0章「ダイアリー」：1

### 0 ダイアリー

九月二十四日

戦友であるハワードが前線から外されることが決定した。上官と揉み合いになった彼を止めるのは自分の役目でもある。

暴れる彼を後から羽交い絞めにして怒りが静まるのを待つ。しかしいつにもましてその怒りは激しいものだった。

興奮した彼に殴られて奥歯が一本抜けた。ぐったりとした様子のハワードを部屋まで連れて行く。その顔は悔し涙で濡れていた。

十月二日

ハワードはすでに精神を病んでいる節があり、上層部もそのような兵士を前線で戦わせるのは危険だと判断したのだろう、

その判断は自分も正しいと思った。この日、ハワードに最後の任務が与えられた。二日後に敵の侵攻予測地点に先行し、

その場で迎撃するというシンプルなものだった。その日、ハワードは部屋から一步も出ようとはしなかった。

（『マスタッシュ大尉の手記』第二章より抜粋）

\*

マスタツシユ・ベールゼンは英国出身の軍人である。米国を中心とした世界連合EU戦線部隊に配属になってすでに九年、

結婚もできないまま人生の貴重な年月を捧げて手に入れたものといえ、

軍内部でのそこそこの出世とそこその人望と人脈くらいなものだった。

だからどうというわけでもなく、彼は焦りもせずただその日を生き残るために戦い続けた。

『マスタツシユ。この戦争が終わったらお前は結婚するべきだよ』

「・・・ハワード、任務中だぞ。それにその話はもう聞き飽きた」

今回の任務はすでに始まっていた。マスタツシユの自機を並走するのはハワードの機体だ。この通信もやはり彼からのものである。

本来このような内容の会話は軍規に反するもので、しかも機体のレ

コードによってしっかりと記録されている。

それを承知でハワードはこの通信をしているのだ。むしろ悪びれた様子も無く彼はいつもの明るいトーンで話を続ける。

『相手は何を隠そう俺の妹さ。良い女だ。気立てもいいし、お前好みのおしとやかな奴なんだ』

「任務に集中しろ。話なら後で聞いてやる」

『いいや、ダメだね！ この話は今しておかないとダメなんだよ。妹にはすでに話してあるんだ。』

お前が迎えにきてくれるのを楽しみにしてる。結婚したら俺はお前の義兄さんになるってわけだな』

マスタツシュは軍での生活と私生活を両立するのは自分には無理だと感じていた。その点では彼と長年の友人である

ハワード「アドラーは上手にその生活を送っていたのだろう。定期的に家族とTV電話で話している彼の顔は確かに幸せそうだったし、画面の向こう側にいる若々しい彼の妻と幼い娘も同じだ。

愛妻家で子煩悩、それがハワードで、マスタツシュにも家族の素晴らしさを何度も語っていた。

しかし妻と娘を戦争で失ってから彼はどこか人が変わってしまったとマスタツシユは思う。

他人、特にマスタツシユにしつこく結婚を勧めるのだ。最初は知り合いの女性を紹介すると言い、次は親戚、そして今は実の妹を彼の花嫁として。

『結婚したら子供をたくさん作るんだ。ああ、そうだなあ・・・、サッカーチームを作れるくらいがいいなあ』

若干焦点の定まっていない瞳でそう語る彼の顔が脳裏に浮かぶ。

長きに渡る人類と異星人の戦争、今現在パワーバランスが平行線を保つようになった結果、この戦争は終わりのないものとなってしまった。

兵士達の精神は疲弊していく一方で、特に敵の襲撃が集中している戦線などはひどいものだ。

かく言うこのEU戦線もまたある意味でも最前線ということになるのだろう。

そんな中で唯一の心の支えだった家族を失ったハワードの精神はすぐに限界に達し、あつという間に擦り切れていった。

『仲人はもちろん俺だからな』

「他人の幸せを考えてやれるお前は素晴らしいと思うけどな、それは押し付けだと俺は思うよ。」

お前の妹さんだって見ず知らずの男と結婚するのは正直嫌だろう」

『いいや、妹はわかってくれたよ。マスターシユ、お前のいいところを手紙にびっしりと書いて送ってやったし、電話でだって言っ  
てやったさ』

「それが押し付けだというんだ！」

少し声を荒げて言い返してしまう。

『俺はお前に幸せになってほしいんだ・・・』

結婚。好き合った男と女が結ばれ、家庭を築き、子供を生み、育てる。それが人の幸せだということに対して否定はしない。

しかしそれは『幸せ』の一つの選択肢でしかないマスターシユはその時激しく思ったのだ。

「お前が前線から外されて正解だった。お前は故郷で結婚相談所で

も開いているといいさ」

今自分と会話している男は自らの『結婚生活』が消滅したのを認め  
きていていないのだ、だから他人に自分の考えを押し付ける。

そうでもしなければ自分の精神を支えきれないのだろう。

そこまで彼を追い詰めたのは他でもないこの戦争だということにマ  
スタツシュは深い憤りを覚えた。

彼が今の今まで前線にいたことが出来たのは長い戦いの中で染み付  
いた技能、それも非常に優れたものがあつたからだ。

長い歴史の中で繰り返されてきた人間同士の戦争とはまったく異  
なつたこの戦争。

相手が人類に敵意を持って攻撃を仕掛けてきているのはわかる、

しかしどのような思想でこの戦争に挑んでいるのか相手と対話する  
術をもたない人類には理解できないことだろう。

友人をここまで歪めた敵を許せない、憎い。

だから戦闘時では一切手を抜くことはない、敵の戦闘兵器が蜂の巣  
になって爆発四散するまで弾を撃ち込む、

それが自分にできる唯一のことだとマスタツシュは思った。



敵を捕獲する必要は無い、今まで敵異星人の兵士が捕獲されたというケースはまったく無いからだ。

今では敵の戦闘兵器はすべて人工知能による無人機だという結論に達している。

自分達の手を汚さずに戦争を行う相手の戦法、それに対する怒り、失った者への弔いも含めて人類は開戦当初の劣勢を跳ね除け、

一気に互角の戦いへ持ち込んだ。人類のさらなる進化の可能性もこの時見え始めたと言えよう。

『寂しいこと、言つなよ・・・』

人類のさらなる進化、それは果たしてすべての人類が迎えることができるのだろうか？

この友人の姿、他者を理解する能力の低下、これが進化の一環だとしたら我々人類の進化の先に待つのは一体なんなのだろうか。

「ハワード、ここで一旦お別れだ。幸運を祈る」

『了解した。それじゃあ行ってくるぜ』

落ち込んだかと思われたが意外にもハワードは、けろりとしていた。彼の機体は器用に片腕を上げて挨拶を交わすと一段階速度を上げて、先へ進んでいく。

その後を数台の支援車両が続き、予定通り敵の侵攻予測地点へ先行する部隊が出来上がった。

マスタッシュを含めた残りの面々は後方待機となっている。

「（一旦お別れだ、か）」

我ながらなんでしょうか、言えない言葉だろうか、マスタッシュは自分の無神経さに呆れつつ、ハワード達を見送った。

こうして見るとやはりハワードの機体は絶妙のバランスを取りながら二本の脚で大地を踏みしめている。その姿は人間そのものだ。

二足歩行の機動兵器、ハワードは確かにその操縦に関してはマスタッシュさえも及ばないほどの才能を持っていた。

もし亡くなった妻と娘の亡霊の呪縛から脱することができたなら、間違いなく彼は巨大人型機動砲手のスペシャリストになっていたことだろう。

「（だが俺にはそんなことをする権利は無い。だから・・・）」

友の中では確かに妻と娘との幸せな記憶が未だに鮮明に残っていて、それを忘れるなどと言えるわけがなかった。

ハワードの機体はいつの間にか肉眼で確認できない距離まで歩を進めていた。

## 第0章「ダイアリー」：2

\*

十月三日

明日でハワードと共に戦うのも最後になるのかと思うと非常に名残惜しい。

しかし今となつてはそれも仕方が無いだろう。精神崩壊する友の姿は見たくない。

任務が終わった後、自分は彼に除隊を勧めるつもりでもあった。

聞けば彼の肉親はすでに妹を残して全員この世にはいないと言うではないか。ならばせめて妹に元気な顔を見せてやってほしい。

（『マスタツシュ大尉の手記』第二章より抜粋）

\*

自分が周りの連中からうつとおしい目で見られているのは彼自身が一番わかっていた。

それでも『出来るだけ』普通に接してくれているマスタツシュには

本当に感謝していた。

だからそんな彼にも幸せになってもらいたいと思い故郷の妹を嫁にと提案したのだが、やはり余計なお世話だったようだ。

今までも部隊のいろんな連中、新兵も古参兵も関係無く結婚を勧めてやったが哀れむような視線と共にあっさりと断られてしまっていた

だがマスタツシユと妹の結婚は本当に出来ることなら実現して欲しかったのだ。

あの男になら妹任せられる、この辛い世界から妹を守っていける、家庭を築いていけると確信していた。

「（この任務が終わったら最後にだめ押しでいってみるかな）」

『アドラー大尉。こちら観測車両一番。レーダーにて敵機動兵器を捕捉』

「あ、ああ。位置を送ってくれ」

一応まだ任務の真つ最中だ。思考を戦闘モードに切り替えてハワードは送られてくるデータに素早く目を通す。

その姿はどう見ても普通の軍人のようで、精神を病んでいる人間とは思えない。だが彼自身、自分が病んでいるのだと感じていた。

『幸せ』に敏感になっているということもわかっていて、それを他人に押し付けようとする自分の言動も。

一通りデータに目を通してふと、起動していないサブモニターに映った自分の姿を見る。妻と娘を失ってから日に日に痩せこけていった頬、

ぼさぼさの金髪、濁ったブラウンの瞳。これでは本当に精神異常者ではないか。

いつの間にか年齢の割に老けていた自分の姿に溜め息をついて、再びメインモニターへと目を戻した。

しかしやはり手馴れた手付きで機体に装備された武装のセーフティを解除していく。

すっかりこの機体の扱いが染み付いてしまっているようだ、恐らく妻以上に巨大人型機動砲手と一緒にいた時間は長いのもかもしれない。

ハウードの操作に連動して彼の愛機は手にした電磁加速砲を構え、砲身を前方へ向ける。

レールガンとも呼ばれるそれは巨大人型機動砲手に巨大化されている。

敵に対して遠距離からの攻撃が有効ということがわかった今、電磁加速砲は敵機動兵器との戦闘には欠かせない武器の一つとなっている。

吐き出された砲弾が敵を穿つ瞬間は堪らないものだと思う。その瞬間だけが今のハワードを真に満たしてくれるのだ。

砲口の先には敵の機動兵器。確認されただけでも六機の反応を観測車両は確認していた。だからどうだというわけでもない。

冷静に、ゆっくりと、集中して狙いを定めてトリガーを引いてけば戦闘は終了している。今までだってそうだったのだ。

敵はソードマンと呼称されている。両腕がブレード状になっているのでソードマン。

ひよろりと背が高く、巨大人型機動砲手よりも頭一個分くらいは大きい。他にもアクスボーイやランスガイなど何体かバリエーションが存在する。

異星人の戦闘兵器と言えば空を自由自在に飛び回り強力なレーザーなどの光学兵器を使用するものとSF小説では描かれている。

しかし実際に人類と戦いを続ける彼らは違っていた。ソードマンは二本の脚でひたすら走り、

目標を見つけると両腕のブレードでさらにひたすら斬りかかる。ただそれだけなのだ。

空も飛ばない、ビームやレーザーなどの火器も撃たない。そして母艦といった艦船も存在しない。

未来的であり原始的でもある異星の彼ら、一体何のためにこの地球にやってきたのか。

そんなことを考えるのは安全な場所でのうのと暮らしている学者達に違いない。

もつとも今の地球には完全に安全な場所など存在しないのだが。

『大尉、そろそろお願いします。敵はすでに有効射程内です』

「ちよつと待つてろよ。・・・えーと二、三発で一機いけるかな」

『あなたの腕は部隊の誰もが信賴しています。マスタッシュ大尉だつてあなたの腕前には敵わないと認めているのですよ』

「そいつあ、嬉しいねえ」

こうやって無意味に自分を誉めてくるあたり彼らなりに自分との別れを惜んでいるのだろうか、

今更誉められてもこれといって感じるものなど無いのがハワードの本音だ。

観測車両からの通信には耳を貸さず適当に返事をしてハワードは深呼吸する。

補正などはコンピュータがやってくれる時代だとしてもやはりそれらは人間によって操られている、



最後に成否を決めるのは人間の腕前なのだ。

ハワードは思考を停止して、第一の目標に照準を合わせた。

その憎たらしい能面に弾丸を叩き込む光景をイメージして操縦桿のトリガーを引く。

「発射するぞ」

カッ！と電磁加速砲の砲口が発光し弾丸が勢いよく飛び出していった。

電磁誘導よって加速された弾丸は速度を落とすことなく歩き続ける目標、ソードマンへ。

ハワードにとってはすでにどうでもいいような瞬間、彼の狙い通り、目標の顔面が鋭い弾丸に撃ち貫かれて無残に吹き飛んだ。

頭部の大半を吹き飛ばされたソードマンの一体は、ぐらりとバランスを崩すものの何とかその場に踏み止まる、が。

「二射目」

完全に踏み止まる時間さえ与えられずに左足が貫かれる。今度こそソードマンは姿勢制御もできずに地面に崩れ落ちていった。

こうなると異星人の戦闘兵器もただの的でしかない。

三発目に放たれた弾丸は地面に突っ伏しているソードマンの脊椎部分に突入しそのまま機体の中央部に進んだ時点で

ソードマンの機体は爆発した。

『さすが大尉だ、この調子でどんどんいきましょう！』

ハワードは先程とほぼ同じやり方ですぐに二機目を撃破する。

敵は学習せずにただ猪突猛進にこちらへ向かってくるだけで回避行動を取るうともしない。それが彼らなのだ。

それでも敵がどんどん近づいてくるのには変わりなく、ハワードは観測車両からリアルタイムで送られてくるデータに

目を通してながら三機目に目標を定めて難無く仕留めてみせた。

それを見て興奮しているのか観測車両や支援車両の兵士達から歓声が揚がる。

『おい、本当に病人なのか？ この人』

『だから前線から外されるんだろ。でも惜しいよな、この腕前は』

こんな会話も時折聞こえてくるがハワードはもちろん気にしない。

別にこれらの会話に対して反応する必要性は無いわけで、その瞳と意識はすでに半分となったソードマンの一群に向けられていた。

「（今回の任務はマスタッシュが出てくるまでも無いな）」

最後の任務は戦友である彼と共に、と心のどこかで願っていたハワードの期待は

相変わらず単純な突撃しか行わない単細胞な敵の姿に打ち碎かれた。

『あれ？ ……大尉、少しよろしいでしょうか？』

「手短に頼む。四機目を喰うぞ」

『敵の侵攻予測進路上に微弱ですが生命反応があります。恐らくこの大きさからして人間かと』

「は？」

それは有り得ない。この作戦領域はハワード達の部隊以外、作戦行動は行われていない筈だし、

かといって民間人がやってくると思えない。

敵の侵攻目的地点、人類の切り札とも言える極秘計画のために欠かすことの出来ない大規模プラントこそが彼らの狙い。

このEU戦線が最前線と呼ばれる理由がそれだった。

観測車両からの追加データ。生命反応。

有り得ないと思いつつもハワードは機体の望遠スコープを使いデータで示された地点を見回してみる。

「う、動いてる」

小柄な物体が確かにそこでちょこまかと動き回っているではないか。

ちょうどソードマンの一群に追われるような形でそれは必死に走っていた。

『大尉、どうしました』

「・・・ああ、あれは確かに人だ！ 人が走っている！」

『しかし有り得ないことでは？ 敵の罠かもしれませんよ。・・・おい！ 確認急がせろ！ 大尉はそのまま敵の迎撃をお願いします』

その声はハワードに届いていなかった

彼の意識はスコープの先にいる小柄な人間に向けられている。目を凝らして、スコープの倍率を上げるとさらにはつきりと見えてくる。

華奢な体、長く伸ばされた黒髪、女性なのだろうか。

布切れのような服を着て、か細い足で走り続ける姿に何故かハワードは見とれてしまう。

そしてちょうどその瞳がハワードの視線と交錯する。明らかに異質なグリーンの眼光がハワードの精神に突き刺さる。

「リ、リリーザ・・・」

ハワードの口は、無意識に今は無き最愛の妻の名を呟いた。

## 第0章「ダイアリー」：3

無残にも異星人の機動兵器によって踏み潰された妻と娘、今自分の目の前にいる女性もこのままでは同じ末路を辿るだろう。

そう考えただけでハワードの中で何かがふつつつと沸き上がってくる。

「かつてのように自分の無力さを恨むのか？ いや違う、力がある、確かに強大な力ではない、

しかし目の前の女一人を助けることくらいはできるはずだ」

部下やマスタッシュに相談するまでもなく彼はすでに選択肢を決めていた。

助ける、と。行動すると決めたからには迷う必要は無く、ハワードは機体を前進させる。

そんなハワードの行動に観測車両の兵士は慌てた様子で通信を送ってきた。

内容はハワードの予想通りのもので、もちろん彼は聞く耳を持たない。

だが彼にだけは、戦友であるマスタツシュにだけは自分の最後の勇姿でも伝えてやろうかとマスタツシュの機体へ通信を繋ぐ。

かなり遠方にいるが最新の機材を使っているだけあって繋がるのは速いものだ。

「マスタツシュ。俺は運がいい、最後の任務にまっとうな『人助け』つてものが出来そうだ」

『ハワード！ 何を考えているんだ、すぐに戻れ』

「人だ、人がいるんだよおおお！ 女だ！ 若い女がいるんだ！

このままだとリリーザやアンナみたいに奴らに踏み潰されて殺されちゃうんだよ、だから俺は！」

『貴様・・・ッ、その行為はもはや正気の沙汰ではないぞ！』

友人の叫びも空しくハワードの機体は徐々に歩く速さを上げていきやがて大地を蹴るように走り出す。

この速度でいけばギリギリ女性を追い越して敵の一群を迎え撃つことができる。

間違っ て踏み潰してしまわないように気をつけないといけない。



これで女性を助ければ何かが変わる、少なくともこのまま見殺しにするつもりなどハワードにはもう毛頭ない。

最後の任務に自らで花を添えたいという気持ちもあったのだろうか。掌が汗ばんでしっかりと握っている筈の操縦桿がぬるぬると滑る。

フットペダルを踏みつばなしにしている脚もまたがくがくと震えている。

日本には武者震いという言葉があった。

敵と戦えることへの喜びからくるもの、気分が高揚したことでの起こる震え、しかしそれは恐怖を誤魔化すためのものに過ぎない。

巨大人型機動砲手とはその名のとおり人の形をした巨大なロボットだ。

敵の技術を応用して人類が開発した反撃の要。人型である利点を活かし、人間のそのものの動作や作業を行うこともできる。

実際には兵器にそのような能力や性能は必要なのかと問われると多くの軍関係者は首を横に振る。

人型よりもっと有効な形があることは確かなのだ。

無駄に巨大なために燃費は最悪、稼働時間は増加ユニットを取り付けなければ数十分くらいしか戦闘には耐えられない。

ちなみに現在ハワードが登場する機体はちゃんと背部に増加エネルギーユニットを装備している。

「そうだ、走れ！ 止まるんじゃない！」

機体を進ませている間にも望遠スコープで女性からは目を離さない。女性とソードマンとの距離はすでに手を伸ばせば届くような距離までになっていた。

このままでは間に合わない、機体の速度はそのままに電磁加速砲の照準を敵へと向けさせる。移動中での射撃はまず命中などするはずがない。

もちろんハワードも命中などさせるつもりもなく、相手への足止めになればと認めるのである。

「発射！ そして間髪入れずにもいっばあぁあつ！」

ぬるぬるになった操縦桿のトリガーを引こうとした指が震え結果的に全部で5発もの弾丸が連続で撃ち出される。

それはちょうど真ん中を走っていたソードマンの胴体部へ吸い込まれるように飛んでいき見事に二発とも命中したではないか。

直撃によって後へ仰け反ったそのソードマンは仰け反ったまま頭部を地面にめり込ませ機能を停止する。

それを見て自分がやったことながら目を丸くするハワードだが土壇場での奇跡に彼の興奮と武者震いはさらに激しくなっていく。

天国の妻が、娘が、そして神が自分を祝福し応援しているのだと、その奇跡に感謝した。

しかし電磁加速砲の放熱が間に合っていない。

無茶な連続発射により過熱した砲身、そしてその砲口から弾が撃ち出されることはもはや無かった。

予想以上に脆く使い物にならなかった電磁加速砲を腰部のウェポンラックに保持し、徒手空拳となったハワードの巨大人型機動砲手。

だがそれを操縦する彼自身は退く事などまったく考えてはいない、考えるわけがない。

左右から挟みこむように突撃してくるソードマンに対してハワードの機体は拳に殴りかかろうとさらに機体を加速させる。

「よし！ このまま逃げるんだ。あとは俺が」

走る女性を大股で飛び越えて、女性が足を止めないことを確認し、敵と対峙する。

い。 巨大人型機動砲手には、基本的に内蔵武器などは用意されていない。

まだ本体自体が詩作品だということもあるが電磁加速砲による遠距離からの狙撃が

主な戦い方である巨大人型機動砲手に近接格闘用の武器など必要あるわけではない。

もし敵が接近したとしても支援車両で迎撃すれば問題は無いと当時の技術者達は考えていたわけだが、現実はその簡単なものではなかった。

このように致命的な問題が多々存在する巨大人型機動砲手ではあるがそこそこの兵器としては発展を続けている。

EU戦線で主力として運用されているのは【タイフーン2】と呼ばれる機体だ。

開発計画によればあと三年もすれば【テンペスト】というコードを与えられた新型が『新兵器』と共に配備されるらしい。

元々巨大人型機動砲手はこの『新兵器』との同時運用を想定されて開発されたようだ。

結論から言えばソードマン二機と巨大人型機動砲手一機による接近戦は圧倒的にソードマン側が有利である。

異星人の兵器は近接格闘に特化しているという特徴があり、そこもまた人類が対抗していく上で重要なポイントでもあった。

先に動いたのは左側のソードマンであった。

さっそくハワードの【タイフーン2】を敵と認識した異星人の人型兵器は両腕のブレードを構えて突進する。

右側の機体はまず左側の攻撃が成功するか否かで援護するかどうかを判断するらしい。

間合いを取るように少し離れた後はまったく動かないでいる。

ハワードにとってそちらよりも今攻撃を開始している側の機体の動きが重要だ。

ソードマンは左右のブレードを交互に振り下ろし、【タイフーン2】を狙う。

装甲さえもそこまで頑丈ではない巨大人型機動砲手からすれば一撃が致命傷になる。

「ちっ」

慣れない接近戦に呆気無くソードマンのブレードが【タイフーン2】

の左肩アーマーを切断した。

返す刀でさらに上半身前部の装甲にさえ切り傷を与えていく。その手際よさにハワードは戦慄していた。

残った右側のブレードが突き出され機体の右脇腹を貫通し、成す術の無い【タイフーン2】の体を足で乱暴に蹴り飛ばす。

それにより無様にも地面へと仰向けに倒れる形になってしまふハワードの機体。

ブレードを抜くための行動だったがそれもまた異星人のプログラムによるものだろうか。

目の前で悠然と立つ敵の無人兵器を見て、ハワードはひさしぶりに恐怖というものを思い出した。

電磁加速砲での狙撃による撃破が当たり前だった筈の相手の恐ろしさは足の震えが止まらない、

武者震いなどではないただの恐怖による震えが彼を襲っている。

ソードマンは倒れたままの相手に止めを刺すべくブレードを突き立ててくるが、瞬間的にハワードは左腕でそれを防御することができた。

何もしないままで死にたくはないという頭の中の考えが無意識のうちに彼の体を動かしていたのだ。

だが防御とはいってもブレードが突き刺さった左腕の反応はもはや

無い。しかしそれに嘆いている暇も無く、ハワードは次の行動へ移る。

ブレードを突き立てたままにいるソードマンのバランスを崩そうと機体を強引に捻らせた。

引き込まれるように倒れこんだソードマンは苦し紛れにブレードを振るが、その前に【タイフーン2】の右手に握られた『何か』に頭部を殴られた。

それは先程使用不能になった電磁加速砲、殴るための武器として使われてしまったその大砲は見るも無残なほどに捻じ曲がっている。

頭部を殴られたことで一瞬だけ反応が鈍るソードマンをさらに【タイフーン2】の拳が襲う。

二、三度思い切り殴られたことでその頭部は各種機器を撒き散らしながら地面へと落下、

【タイフーン2】はブレードが刺さったままの左腕を強制射出すると立ち上がり、ソードマンの頭の根元へその拳を叩き込む。

突き刺さった拳はソードマンを行動不能なってしまうほどの損害を与えたあと、ボロリと千切れ落ちる。

巨大な人型兵器が必死に敵を殴っている姿は端から見ればなんとも滑稽なものだったが、なんとか初の接近戦を勝利することができたのだった。

だが味方が行動不能になっても、まったく動こうとしない最後の

敵機の意図とは？そんなことを考えている暇も無く、

耳を刺すような警告音と共にモニターが真っ赤に点滅する。それは、この戦いの敗北を告げる鐘の音でもあった。

「稼動時間限界だ！？　　まだだ、まだ停止するな！」

それを見計らったように最後のソードマンはふっと動き出す。

もはや満足に動くことも出来ずにいる目標に狙いを定めるかのように両手のブレードを構えて、今にもこちらへと突撃してくる勢いだった。

敵を確実に撃破するためであろうことか味方を見殺しにしていたのだ、もちろん無人機にそのような概念は関係無いのだろう。

しかし二機が同時に攻撃を仕掛けてきてもどちらにせよ【タイプ1ン2】では相手にならなかった。

ハワードがどんなに優れた操縦主だとしても、だ。

「こんな、ところでええええ！」



モニターがブラックアウトする瞬間、ハワードはソードマンがブレイドを前に突き出しながら向かってくる姿を目にした。

皮肉なことに彼の最期に見た光景は自分の妻と娘を殺した相手が、自分を殺すために向かってくる姿だった。

## 第0章「ダイアリー」：4

\*

十月四日

ハワードが死んだ。愚かにも単機でソードマン数機に接近戦を挑み敗北した。

心のどこかで解放されたと思ってしまっ自分がいることに驚いた。

彼との最後の通信を行った時点でハワードの精神は限界に達していたのではないだろうか。

だがこれで彼も解放された、残された者の悲しみ、愛する者を奪われた恨み、それらのしがらみから確かに彼は解放たれ、

待っているであろう愛する家族のもとへと旅立ったのだ。

せめて天国では家族と幸せに暮らして欲しいと、私は一人の友人として願うばかりである。

十月五日

ハワードが言っていた女性が保護されて基地へとやってきた。

しかし女性というよりもまだ全体的に幼い体つきをした少女である。

その少女の姿を見て誰もが目を奪われたのがその瞳、まるで眼球の形をしたエメラルドの宝石がはめ込まれているかのように

彼女の瞳は緑の光を放ち輝いていたのだ。

十月六日

少女は視力が無い、盲目だということが精密検査で明らかになった。

幸い問題と言えばそれだけなのだが、彼女の目に納まっている宝石は結局取らないでそのままにすることになった。

彼女自身を取り外すのを拒んだらしい。

保護された時の彼女の服装はボロ布を服のようにして身に纏っているだけというもので、

しかも明らかに不自然な目にはめ込まれた宝石、基地の兵士達はどこかの変態に玩具にされた可哀相な少女だと決め付けていた。

十月九日

私は何故か少女の世話係を任せられることになった。

一番『そういった趣味が無さそう』というわけのわからない理由から基地の女性兵士の希望もあつてのことであるが、

あえて男性である自分を推薦した意味はなんなのか、考えてみるとやはりハワードの名前が浮かび上がってくる。

彼が命懸けで助けた少女を彼の一番の親友であつた自分が面倒を見る、そういうことなのだろう。腑に落ちないのは言うまでも無い。

さっそく自室のベッドを占領されてしまった。

床で眠るなどまっぴらごめんなのだが、だからといって少女と体を寄せ合つて一つのベッドで寝るなど耐えられるわけではない。

十一月十二日

少女と出会つて約一ヶ月が経過した。盲目であるため何かと少女は自分に引つ付いてくる。

それを拒むわけにもいかず渋々腕を掴んだり、服の裾を握つたりするのは黙認しているつもりだ。

だがそんな私達の姿を見て基地の兵士達は冗談半分でひやかしてきたりするのでたまつたものではない。

なんだかんだで少女は今の環境に慣れつつあり、ひやかされている私の姿を見て楽しそうに笑いながらさらに体をくっ付けてきたりする。

どこか荒んでいた自分の心が癒されている、そんな気がしたのもその時だった。

（『マスタツシュ大尉の手記』第二章及び第三章より抜粋）

\*

「この本、面白いですね」

ちょうど半分まで読み終わったところで手にしていた文庫本をパタンと閉じる。

新しい本が入っていないか覗くだけだった筈が結構な間、本屋にたむろしていたことになる。

それでも彼女は涼しい顔でこの店の主に声を掛けた。ひょいと顔を出した店主は彼女の立ち読みに対しては特に咎めようとはしていないようだ。

元々趣味で始めたという古本屋、最近は最新の雑誌なども取り扱っているというこの村で唯一の本屋。

しかし店内には彼女以外の客は見当たらない。

「どれくらい読んだんです？」

「半分くらいかな」

「じっくり読めるように見えたんだけど相変わらずの読むのが速

いなあ、お嬢さんは」

この店の常連であり、店主の友人の娘でもある彼女。歳は今年で十七歳だが、それでも全体的に小柄で非常にか細い印象を受ける。

それでいてその表情は常に冷静で大人びたものだった。氷のように透き通った顔に微笑を浮かべながら彼女は店主の目の前へゆつくりと歩み寄る。

「じっくり読んでましたよ？　好きなんです。物語の場面を自分で想像するのが」

「それが小説の醍醐味でもあるからね。それは正確には日記みたいなものだけど」

正直言うと彼女が今読んだという『マスタッシュ大尉の手記』、どのような内容でいつ頃出版されたか店主はすっかり忘れてしまっていた。

店に置いてある本のデータはすべて頭に入っていると自覚していたが、早くも老化の影が見え隠れしているようである。

「・・・まだ30代だぞ」

「何か？」

「いやこつちの話です。それにしてもそれ、確か軍記もの？ 女の子なのにそういったジャンルに興味があるのかな？」

「最近、ちょっとした事情で」

ふと微笑が消えてどこか機械的な声で店主の問いに答える。

何か地雷を踏んだのだろうか、と店主はそれ以上追求するのを自重することにした。

何か他の話題でも無いかと考え始めた矢先、意外にも彼女が口を開く。

「兵士がどんな気持ちで戦っているのか気になったんです」

「確かにその手記はノンフィクションだけど、結構脚色されてると思うよ？」

この手の本というのは大抵そんなものだということは、多くの本に触れてきた彼の経験から言えることだ。

『マスタツシュ大尉の手記』が実際どうなのかは別だったが。

「ええ、でも登場人物の『ハワード』がどんな気持ちで最期の任務に挑んだのか、そして『少女』を助けたのか、大体はイメージできました」

少し恥ずかしそうに言う彼女を見て、知識欲が旺盛なのだと店主は思い、『あの人』の娘らしいと言えはそうだと感じた。

『あの人』も彼が舌を巻くほどの知識量を持っていたのだ。

ちなみに村では才色兼備頭脳明晰と評判なのも彼女であつた。

実を言うと独身である店主はできることなら彼女を嫁にしたいという願望を持っていたが、さすがに歳が離れすぎている。

恐らく端から見れば犯罪だろう。それ以前の問題として『あの人』の娘に易々と手を出せるわけがなかった。

今となつては儚い夢となっている。

「あの、私の顔に何かついてます？」



「い、いや。ところでその本はお買い上げですか？」

彼女の手握られている『マスタッシュ大尉の手記』を指差す。

だが空いていると思っていたもう片方の手がレジの上に別の本を差し出した。

「ごめんなさい、つい持ってきてしまいました。買うのはこっちなんです」

本のタイトルは『はじめての模型製作』とあり、表紙には戦車や戦闘機などの模型が描かれている。

内容はタイトルのとおり模型製作初心者向け入門誌のようである。些か拍子抜けしたように店主は本を紙袋に包み始めた。

「ちょっと意外ですね。お嬢さんがこんな本を買うなんて」

「少しでも手先が器用になればいいなと思ひまして」

それで模型製作、細かい部品を組み合わせで完成品を作る作業を訓練にするつもりのようなのだ。

彼女は確かに顔立ちも整っているということでは何かと人の目を引きがちだが、特に目がいつてしまうものがある。

それは彼女の左目を覆っている眼帯だった。

布の面積は少なめだがしっかりと左目を覆っている眼帯はある意味で彼女の目印のようなものでもある。

一目で『あの人』の娘だということがわかる。

『あの人』や彼女自身は怪我によるものだと言ってはいるが、詳しくは店主も聞かされていない。

彼自身知識欲は旺盛な方だがさすがにずけずけと聞こうとも思わないようだ。

「片目だと平衡感覚とかがおかしくなるみたいだからね、それでも普通の人と変わらないじゃないか・・・はいつと、三百円になりま

す」  
「もう大分慣れました。小さい頃からですし」

小さな財布から百円玉を三枚、店主の掌に乗せて彼女は紙袋に包ま

れた本を受け取った。

そして軽く会釈すると店の出口に歩いていく。途中『マスタツシユ大尉の手記』を元の本棚に戻し店の扉に手を掛けたが、ふとその手が止まる。

「あの、一つ聞いてもいいですか？」

「どうしたの？」

「マスタツシユ大尉に懐いた女の子は最後どうなるんでしょうか？」

その本がどのような内容か覚えていない、しかし変なプライドからつい彼の口は勝手に頭の中で考えた嘘の内容を口走る。

「えーっと、彼女はマスタツシユ大尉のパートナーになって一緒に戦い続ける。」

そして最後には彼と結ばれて、静かな地でひっそりと幸せに暮らすのです」

それを聞いた彼女の顔がぱあっと明りを灯したように明るくなった

のが離れたレジからでもわかった。

誰もがハッピーエンドを望んでいる、彼女もそうだったのだろう。

「次来る時はその本買いますね。よければ他の人には売らないで欲しいかな」

笑顔でそう告げると嬉しそうに店を後にした。

その姿を見送ってどうしてこんな嘘の内容を喋ってしまったのかと、心が痛む。

少し悩んだ後、彼女が本棚に戻した『マスタッシュ大尉の手記』を彼は手にしていた。

「・・・」

終章となっている第五章に目を通す。できればハッピーエンドであって欲しいという願望を内心抱きながら、次々とページを捲っていく。

しかしその内容に、その衝撃的な展開にページを捲る手は次第に

遅くなっていた。

「ああ、なんてこった。なんだよこの終わり方はっ」

これがノンフィクションの実話だとしたらマスタッシュ大尉と少女はなんと不憫なのか、

というよりもこれがノンフィクションらしい『バッドエンド』だと冷静に考えてしまう。

最後のページを読み終えた時点で彼はさらに嘘をつくことにした。

この本は店の奥底に隠してしまおう、できることなら他にこの作品を読んだ者がこの村にいませんように、

店主は彼女に詫びながらもこうした方がよいと思ったのだ。

しかしその嘘が後にどのような結果をもたらすのか、今の彼にはわかるはずもなかった。

## 第1章「要塞村」：1

### 1 要塞村

初春、一人の青年は些細な出来事で奇妙な運命に巻き込まれることになる。

「言っている意味がよくわからないのだが？」

「だからこんな子供を操縦主にする必要は無いと言っているんです」

青年はごく平凡な家庭に生まれごく普通の人生を歩んで、すでに二十四年。

平均よりも少し高い身長に短く切り揃えられた黒髪と、容姿もこれといって特徴が無い。

だがそんな彼はここにきて人生の分岐点に立っていた。もちろん彼自身はそれに気づいてはいない。

普段は温厚な性格の彼だが今は珍しく語気を強めて目の前に立つスーツの男に食ってかかっている。

その男はスーツを優雅に着こなして、能面のような顔に冷笑を浮かべていた。

彼は必死に何かを話している青年とその隣で困ったようにオドオドしている少年を交互に見つめてる。

「いくら志願したからといったってわざわざ子供を戦場に出すなんて納得いきません」

「彼自ら望んできたんだから別に問題は無いだろうに。それに今は子供だ大人だと言っている場合でもないだろう」

そついったやり取りが先程から続いていた。

スーツの男は一応この民間軍事会社のトップでもある、その気になればこの青年など外にあつという間に放り出すことができる立場だ。しかしあえて彼はそんなことはせず自らがじきじきに論破してやるうという考えを持って青年の相手をしているのだろう。

事の発端は彼が少年の方を正規の操縦主に採用すると言い出し、それに青年が意見したからである。

「私を操縦主にしてください。彼を採用するのは私に何かあってか

らでもいいではないですか」

「君の言ってることはただの時間稼ぎじゃないか、結果的に彼は戦場でGHに搭乗し戦うことになるんだぞ」

「だから・・・」

「私は偽善者があまり好きではないな」

「偽善ではなく正しいと思うことを言っているだけです。時代だからといって子供を易々と戦場に出すなど許されるものでしょうか！」

「フン、随分と狭い価値観をお持ちのようだな君は」

相手が社長だろうが関係なく鋭い視線で睨みつける青年、どちらも引く気配はない。

どうしていいかわからずにうろたえている少年に加えて男の秘書もまた大人気ない社長に困り果てているようだ。

「社長。そろそろお時間が・・・」

「そんなことはどうでもいい。今は勇敢にもこの天原刀伍に挑んできた青年の相手をしてやらねばならないのでな。」

さあ、存分に議論といこうじゃないか」



口の端を歪めスーツの男性は笑った。その表情に青年は少しだけゾツとしたがそれでも引くという考えはまったくない。

むしろ負けられないという思いが強くなっていく。

自分に気合を入れたその時、スーツの男はその若々しい顔に酷い笑みを浮かべて言い放つ。

「明地直彦、といったか。君は私が自分の娘を戦場に出していると言ったら・・・どうする?」

その一言ですべてが、吹き飛んだ。

少年と秘書の制止も意味は無く。固く握られたその拳は真つ直ぐに気色の悪い笑みを浮かべた顔面へと吸い込まれ、そして・・・。

「ふざけるな!」

拳を避けようとしなかったスーツの男性は大きく後ろへ吹き飛ば

され、受身を取る暇も無く床に叩きつけられた。

直彦の拳には確かに彼の顔面を殴ったという感触が残っており、同時にやってはいけないことをしたという当たり前の罪悪感もまた沸き上がってくるのだった。

「し、しまった」

「じゃ、社長！？　だ、誰か・・・」

もはやパニック状態に陥った秘書はスーツの男に駆け寄り、息を大きく吸い込み助けを呼ぼうとする。

素早く跳ね上がった男の手がその口を遮る。

「君は黙っていたまえ」

秘書が落ち着くのを確認すると、切れた唇の血を軽く拭い何事も無かったかのようにむくりとその長身を引き上げらせる。

オールバックの髪は少し乱れてはいるが彼自身は涼しい顔をしている。

「あと少年、君はもう帰っていいぞ。不採用だ」

すでに少年はこの場から早く離れたいと思っていたのでその言葉はありがたいものだったようである。

すぐさま一礼すると風のように社長室を後にした。残っているのはスーツの男、天原刀伍とその秘書、そして直彦だけだ。

直彦はというと、呆然としてその場に突っ立っていたのだが。

「議論する必要も無かった明地くん。操縦主は君で決定だ、おめでと」

「いや、私はその」

「久しぶりに殴られたよ。なかなか痛いものだな。まあ、座れよ」

痛がっているようには見えないような無表情で言われてもまったく説得力は無いが、一応切れた唇を気にするように何度か手を当てているようだ。

言われるがまま近くにあった椅子に腰掛ける直彦。彼は自分がどうしても操縦主になりたくて社長に食ってかかったわけではない。

まだ十代後半の少年を何の躊躇いもなく戦場に送り出そうとしている彼の態度に疑問を持ち、何か一言でも言ってやりたかったからなのだ。

しかしこれでは自分が強引に操縦主になろうとしているようにも見える。

社長を殴ってまで操縦主になりたいのか、この事を知った世間の人々はそう口々に言うだろう。

「天原社長」

「まさか今更辞めるなんて言わないだろうな？ あそこまで言うんだ、だったら自分の手で未来ある若者達の日本国を守ってくれよ」

「・・・あなたは自分の娘を戦場に出していると、確かにその口で言った。それは本当ですか」

「君が戦うことで結果的に私の娘も守られることになる。君の意見を尊重すればそういうことなんだろう」

天原の言うことは確かにもっともであり、元々直彦自身そのために民間の訓練校で

四年間学び巨大人型機動砲手、通称【ガンナーハンス（G H）】の操縦主、つまりパイロットに志願したのだ。

最初から迷う必要など無かったのだ。この天原が何を考えているようが何も関係無く、直彦には自分の『信念』があった。

「改めて、私にやらせてください。G Hの操縦主を」

「そうこなくては。それに私は君が気に入ったよ」

目が晒った。確かに心底嬉しそうに一瞬だけ冷笑を浮かべ続けていた天原の目が晒ったのだ。

しかしやはりどこか不気味なのに代わりは無い。ずっと両手を差し出して強引に直彦の右手を取り、がっしりと握る。

それをポカンとしながら見守っている秘書。

「さっそく私の故郷で任務に就いてもらえないか」

「故郷？」

「要塞山村『百済村』、さ」

このどこか異様な雰囲気を持つ社長の故郷、一体どのような村なのか。若干の不安と共に強い使命感が直彦の体を支配していた。

それと同時に彼の『運命』が進むべき道もまたこの時決定したと言ってもよいだろう。

## 第1章「要塞村」：2

\*

山村というだけあって目的地の百済村は深い山奥に位置していた。

こんなところで任務など左遷にも等しいものであるが、さすがに社長に文句を言えるほど直彦は勇敢ではなかった。殴ってしまった件もあるからだ。

ここは黙って荷物を纏めてさっさと村へ行こうということになり、その数日後にさっそく長い間住み慣れたおんぼろアパートを解約したわけである。

手身近な交通機関を利用して村へ行くはずだったが、驚くことに社長自らが豪華なベンツでお迎えに来たではないか。

ここまでしなくても、と直彦の戸惑いをよそに社長である天原刀伍はにやりと笑い、彼を車の中へと招いた。そして。

「あの」

わずかな荷物（中身は数日分と水と食料に各種アウトドアグッズ）が詰め込まれたサックを背負いながら直彦は

軽快な足取りで前を歩く男に話し掛けた。それはどこか疲れているような、困惑しているような声色だった。

「なんだい明地くん」

「ベントツで百済村まで行くのではなかったですか？ それなのになんでわざわざ徒歩でこんな山道を歩いているのです」

「誰もベントツで行くなんて一言も言っていないよ。だけど君の荷物は先にトラックで運んでもらったから心配しなくていい」

がつくりと肩を落とす。そうすると背負った荷物の重さが増したような気がしてさらに直彦の疲労感もまた増していくのだった。

もういらぬものばかりが上昇中なのである。

ベントツに乗るとすぐに手持ちの荷物を没収されて（中に乗っていた大柄の黒服に）代わりに山登りなどでよく着る服装一式と

アウトドアグッズが詰め込まれたこのサックを渡されたのだった。この時点ですでに状況が理解できないが、

うつすらとこれから行く場所とこの支給されたアイテムから推測してみるとおのずと答えは出てくるのであった。



「山越えが最初の任務なんて聞いていません」

「まあ、そう不貞腐れるなよ」

今の時代に徒歩で山越えなどよっぽどのが無い限りはほとんどの人はやるうとは思わないだろう。

もちろん直彦だってそこまでアウトドア派ではない。

歩き始めて数時間、相手が社長だということも忘れて直彦の口からはポツポツと愚痴がこぼれ始めていた。

一方の天原はそんな彼の愚痴を軽く流して、先程と変わらぬ足取りで先頭を進んでいる。

彼の年齢は四十代後半だと聞いたが体力の衰えを感じさせないほどの身軽さで直彦は驚いていた。

まず容姿の若々しさからして人間離れしていると感じてはいたのだ。

「明地くん、君は自分が平凡な人間だと思うかね」

「はい？・・・それは標準的だとは思っていますが」

「それじゃあダメだ。平凡で普通の人間なんて私は興味無いのだよ」

「それとこの山越え、何の関係が？」

唐突な内容の話を聞く傍らサックにぶら下げていたペットボトルを手に取り、中に入っている水で乾いた喉を潤す。

ただの水でもこの状況ではどんなものよりもありがたい、そして美味い。

「私の計算では百済村に到着するのはここから約三日後になる」

「え」

「そしてそのサバイバルサックに入っている水と食料は一日分しかない」

立ち眩みがして直彦はその場で立ち止まる。今、なんと聞いたのだろうかこの男は。

彼の話からすると一日分しかない水と食料で三日間歩き続けなければならぬということになるではないか、

なんというサバイバルであろう。

「簡単に言つとこれは試験だよ。君がこの行程で百済村に辿り着けたら合格つてわけだ」

先日、直彦はこの男を殴ってしまった。今は非常に反省している、やはりすぐに手を出すのはよくないことである。

人間には他の動物には無い言葉を持っている。それなのに暴力で済まそうなど原始人以下ではないか、と彼は思った。

「・・・辿り着けなかったら？」

「ただの屍。骨は誰かが拾ってくれるだろう」

軽い目眩と共にもう後戻り出来ない領域にまで足を踏み入れたことに今更気付いた直彦だった。

そして今むしように目の前の男を殴りたい衝動に駆られたが、僅かな彼の理性がそれをなんとか抑え付けている。

一方の天原は悪びれた様子も無く山道をぐんぐん進んでいき、その後ろをしぶしぶ直彦が続く。

その間に、会話による体力の消耗を避けてのことだろうが頻繁に話し掛けてくる天原に対して適当な相槌を打つだけになっている直彦。奇妙な二人組は深い山奥の中を歩き続けていた。数分後、天原は不満そうに後ろを歩く直彦を振り返る。

「明地くん。君はさっきから『はい』とか『そうですね』とか適当な返事ばかりだな。」

私はその反応に非常に退屈しているわけだが、君から私に質問などはないのかね？ コミュニケーションは大事だぞ。

この私の立場など気にするな、核心に迫る質問もどんと来い」

この天原刀伍という男は本当に直彦のことが気に入っているようで、彼の出身地や家族構成、

その他詳細な情報などをしつこく聞き続けていたのだ。だが先述したとおり彼は非常に平凡な人間である。

父親が過去の大戦の英雄だとか、母親が実は敵の宇宙人だとか、世界を揺るがすほどの特殊能力を持っているということはまったくない。

すでに両親は二人とも他界してはいるが。

天原は平凡で普通な人間は嫌いと言った。それでいて平凡を絵に描いたような男である直彦にここまで興味を持つというのはどういうことなのか、

質問責めにあっている本人もまた疑問に思うことなのである。

「社長はどうしてそこまで平凡な私を気に入っているのですか？  
やはり先日社長を殴ったことが何か関係しているのでしょうか」

思い切ってそう質問してみると天原は真面目な顔で少し考える素振りを見せた。

少なくともちゃんとした理由があるのだろう。

「面白い奴だと思ったからさ。顔も知らなくて、しかも実在するかわからないような私の娘のために」

この社会的に超上流階級で勝ち組な私を躊躇無く殴り、くっさい台詞を間に受けて二つ返事でGHの操縦主になっちゃったところだな」

「もしかして馬鹿にされている・・・」

「まあ簡単に言っちゃった『馬鹿』だな君は。」

『馬鹿』は『馬鹿』であって平凡とは違うし『天才』と『馬鹿』は紙一重とも言っただろう？　そしてさらにこうすれば・・・っと」

何を思ったのか天原はいきなり直彦のペットボトルを奪い取ると中身をその場に捨て始めたではないか。

水は重力に逆らうことなく流れ落ち、すぐに地面へ吸収されてしまふ。

呆気にとられてしまい結局直彦が止めに入った時には数滴の水が入っているだけになってしまっていた。

話の内容もあまり理解できなかったが、この言動もまたさらに意味不明であり直彦の頭の中はさらに混沌としてくるのだった。

「貴重な水が！」

「フム、これでさらに状況は悪化した。だがこの状態で山越えを成し遂げられたとしたら君は平凡で普通な人間ではなくなる。」

『すごく馬鹿』になれるのだよ」

「そんなに馬鹿馬鹿言われて嬉しくもありませんよ」

「つまり普通ではない事実が必要ということだな。『馬鹿』というのはあくまで例なのだ。」

別に奇人変人でも構わないのだよ、普通じゃなかったら私はそれでな」

「少なくともこのまま死んだら『ただの馬鹿の屍』になってしまうということですね」

「ホウ、わかってるじゃないか。要は死なずにやり遂げるか否かなんだな、この試験は」

「それだけはまっぴらご免です！ 先を急ぎましょう！」

「ハハ、元気になったじゃないか」

村の正確な位置は天原にしかわからないので嫌でも彼に先導してもらわなければならない。

しかし天原はまだ喋り足りないような顔をしていたがこの悪化した状況でそこまで相手に配慮できる余裕など直彦にはなかった。

もちろん彼の話もまた理解し難い内容であつたのは確かである。

そして直彦はやはり自分は平凡で普通な人間でいるのが一番で、

同時に天原刀伍はとんでもない変わり者だということを再確認したのである。

変わり者というよりはすでに変人の域に達しているのかもしれない。

突然軍事関係の業界に現れたかと思うと驚くべきスピードで事業を成功させ、日本国外の企業からも一目置かれる民間の軍事企業のトップになり、軍の上層部とも太いパイプを持っているとも言われている。

現に数機のG Hは彼の管理下にあり、独自の改良を加えられたカスタム機がほとんどだという。

そして彼の生まれ故郷である（らしい）百済村もまた今は少々変わった状態にあるとのことだった。

ある人は今の百済村を【要塞山村】と呼び天原自身も直彦にそう囁いた。

「（だからどうってことでもないよな。僕は僕がやるべきことをやるだけなんだから）」

直彦は生きて百済村に辿り着くことを優先させるため余計なことは考えないように努力した。

もちろん天原の話は基本的に無視する方向で決まっただけらしい。

「最後に明地くん。娘のことだけどね、あれは本当だからな」



「嘘だとしても帰ろうとは思いませんよ、ここまで来てしまったのですから」

それを聞いた天原は面白そうに笑う。直彦はそこで笑う余裕などは無かったので

無表情のまま天原が先に進んでくれるのを待つ。

「君は、本当に面白い男だ。娘も、シホリもきつと気に入ってくれるだろう」

そう言っていると彼はピタリと笑うのも喋るのもやめて前を歩き始めた。その時の表情がどこか今までの彼とは違った雰囲気だった。

天原刀伍、山を越えたところにある百済村、自分の任務、そして天原の娘。

それらよりも生存のための思考が優先されそれについて今は考えるべきではないと直彦は判断したのだ。

辺りがすっかり暗くなるまで二人は黙々と歩き続けた。

## 第1章「要塞村」：3

\*

直彦と天原がどのようなトラブルに遭遇しながら進んでいったのかは割愛するとして、

少々の空腹と喉の渴きを感じながらも百済村のすぐ近くまで歩を進めていた。

喉が渇くといってもそもそも川に沿いながら村を目指していたので水に困ることはなかったのだ。

幸い天候が悪化することもなく、それに加えて天原が正確に道を記憶しており

さらにアウトドアの専門的な知識まであったのもスムーズにここまですることができた理由とも言えよう。

途中で熊らしき影を見かけた時はさすがの天原も肝が冷えたと言っていたが、

熊らしき影はそのまま彼らに接触することなくどこかへ行ってしまった。

3日間の山越えは順調に終わりへと近づいていたのだ。

「社長。それは『ちんすこう』ですよ」

「なに？　そうか、『ちんすこう』だったのか。沖縄ってのはどうも変わっているな」

もう少しで到着するということもあって若干の余裕が出てきた直彦はちよくちよく天原に話し掛けていた。

最初の頃とは逆であるが天原はそんなことは気にせず陽気に受け答えしている。

会話の内容は他愛の無い雑談から真剣な話、主に任務のことなど様々である。この三日で大分打ち解けていると直彦は感じていた。

と同時に天原がまるでそれを見透かしたような話題を振ってくる。

「明地くん、ストックホルム症候群って知っているかい」

「極限状態に陥った人間同士に強い信頼関係が生まれるというやつですか」

「そんなところだな。君はその信頼が固い絆や結束、友情や愛情に基づいたものだと思うかね」

ストックホルム症候群、例えば山で遭難したお互いに見知らぬ男女の間に愛情が芽生える、

強盗犯と人質に強い結束が生まれ人質が強盗に協力してしまうなど確かに極限状態で起こりうるものだと言われている。

天原はその状況で生まれたものが偽りか否か、ということを知っているのだろう。

「その人の中に確かに何らかの感情が生まれた時点でそれはやはり偽りのないものなんじゃないでしょうか」

「だが極限状態に追い詰められなければその感情は生まれないのだ。

誰が好き好んで犯罪者に手を貸す？ まったく知らないような相手を好きになる？」

まあ恋愛であればヒトメボレということもあるがな、と天原は付け足した。

どうしてそんな話を私に？と返答することも直彦にはできたが、あえて彼はそう答えなかった。

じっくりの頭の中で天原の問いを自分なりの経験と知識から考える。

「信頼関係とはある程度お互いを見知っていなければ成立しないと私は思う。」

君はどう思う？ 生まれたもの、それは偽りのない感情がこもっているものなのか」

結局直彦はその問いに答えることはできなかった。

何か口に出そうと頑張ってみても言葉が発せられることはなく、

ただ『ううん』『あー』など言葉にならない呻きだけが天原の耳に届いていた。

天原は必死に答えを探す直彦を微笑ましく思っているのか、それとも小馬鹿にしているのかわからないような笑みが浮かべていた。

「保留で、保留でいいですか？ ……よく考えてみたいのです」

「ナイスな答えだな明地くん、君は見所があるぞ」

「答えはまだですけど」

「適当に流さず、話題を変えずに真剣に考える、というのが私にとってのベストアンサー。よく考えてみたまえ」

「・・・はい、そうします」

天原は変わった話をする。普段からこうなのかはわかりかねるが、ある意味直彦にとって彼の話は新鮮なものだった。

だからこそ真面目にストックホルム症候群の問いに対してのベストアンサーを自分なりに探しているのだ。

天原にとっての真のベストアンサー、求めている答えを出すことができるのかは微妙なところだったのだが。

「もう少しでこの木と川だけの風景から抜けられるぞ。我が故郷は目と鼻の先だ」

「やっと到着なんですね」

「ああ。とりあえず試験は合格だな、今日はゆっくり休みたまえよ」

話している間は長時間の徒歩の疲れも感じず彼らはここを降りれば百済村、というところまでやってきている。

そこで何か思い出したように天原がポンと手を叩く。

「そうだ、娘の手料理をご馳走してやらないとな」

直彦はどこかそのことを頭の隅に追いやっていたが天原の娘は実在していた。

彼女がいてもいなくても直彦の気持ちは決まっていたがどこかで実在しているという事実には安心して自分のいることに気付く直彦だった。

そして村に近づくにつれてどんな娘なのか興味が沸いてきていた。さすがに父である天原そっくりということはないだろうが、

本当にそっくりだったら直彦はただ苦笑してしまうかもしれない。

「娘さんはいくつですか」

「上が今年で十七、下が十六さ。どちらも個性的なんだよな、これかな」

どこか人間離れしている彼の顔が父親の顔をした瞬間だった。

しかしここにきて初めての情報が彼の口から出てきたことに直彦は聞き逃さなかった。

「姉妹なんですね。初耳です」

「そうだよ。君と関係してくるのは姉の方かな、シホリっていうんだ。ちなみに妹の方は真弓だ」

天原シホリと天原真弓。シホリはカタカナ表記でそのまま【シホリ】と書き、妹の名前は普通に漢字だと天原は言った。

ネーミングについては突っ込まなかったものの、戦場に出しているというのはどうやら姉の方らしい。

そこで直彦は急にどこか胸がモヤモヤしてくるような、得体の知れない何かに襲われるような気がして片手で自分の胸を強く押さえつける。

どこか親しくなってきた天原に出会った時と同じような不信感が自分の中で再び生まれてきていた。

しかしそれを口にしようとはしなかった。疲労が堪っている今、彼と討論などする気がしないからである。

討論になれば彼は間違いなく気が変わるようなトラブルが起ころない限り討論を止めることはないだろう。

娘、天原シホリが天原刀伍とそっくりだとしたら彼女もまた父と



同じような考えで自ら戦場に出ているのかもしれない。

そう思うと直彦の怒りや憤りもどこか空しいものになってしまう。

他人である直彦がどうこう口出しする意味も無くなってしまうのだ。  
った。

なぜか天原シホリの存在に揺らいでしまう明地直彦の『信念』であった。  
った。なんとも脆いものである。

「どうした？ 顔色が悪いぞ。もう村はすぐなんだから頑張りたい  
えよ」

「そうじゃないんです。そうじゃなくて・・・」

この揺らぎが疲労によるものなのか、それとも彼自身の変化なのか、  
それは本人しかわからないことである。

ストックホルム症候群の件と同様それも直彦の脳内で保留とされ  
た。

今までこのようなことで悩んだ経験は彼にはないし悩む必要もな  
った。

天原刀伍、この男との出会いが自分の何かを変えたという気がして  
直彦は少し心配そうにこちらを見つめる当の本人を見やる。

気付けば歩いていた筈の足が止まっているではないか。疲労なのだろうか。

「娘さんは、シホリさんはどんな人です」

自分でも驚くくらい無感情にその問いは自然と発せられた。

様子のおかしい直彦を気遣いつつ天原は返答する。

「いろいろなことを自分の中に抱えやすい子だな。 繊細なんだよ、あれは」

ただそれだけが直彦に対する答えだった。

繊細な子なのか、次第に自分の中で好き勝手に天原シホリのイメージが出来上がりつつあることに気付き慌ててそれを払拭する。

やはり疲労のせいだと、自分の異常さに直彦は僅かだが恐怖を覚えてしまった。

「君はどうも娘のことになると様子がおかしくなるなあ。私を殴ったのだってそれが原因なようなものじゃないか」

天原の言うとおりである。やはり直彦の身を案じている天原に彼は適当に空腹で、と言い訳をしておく。

このことはもう忘れたかった、どうして自分がここまでこだわるのかなど保留する必要もなく、

すぐにでも消し去ってしまいたいものだ。

「フム、少しきつかったかな。さあ、頑張れ我が家は山を降りてすぐなんだからな。昼には間に合うようにしよう」

このサバイバル試験は少しやり過ぎと思ったのか妙に優しくなった天原に促されて再び直彦はゆっくりと足を進めた。

歩いている間、天原は背を押してくれたり何故か所持していたうちわで扇いでくれたりとその姿は大企業会社とは思えないものだった。

ついに緑の風景を越えて、視界に入ってくるのは意外にも広大な人が生活しているということが一目でわかるようなごく普通の村が

そこにはあつた。

しかし到着した達成感よりも自分の記憶に引つかかっている何か  
気になって直彦はそれどころではなかったのだった。

娘と父、本当に忘れたい何かが・・・。

## 第1章「要塞村」：4

\*

そつと戸を開けると非常にこざつぱりとした空間が広がっていた。

畳が敷き詰められたそこには勉強机と黒光りする大きな棚があるだけで数年前からまったく変化していないことに驚かされる。

部屋の中心では部屋着のまま畳に横たわっている少女がいた。安らかな吐息を立てて眠っているその姿に彼女の妹である侵入者は

ふと目を細めた。姉はどこか他人と違った雰囲気を持ち主だと妹は感じていた。

「・・・」

つやつやと輝く黒髪、伸ばされたその一束をそつと摘んでみる。

その手触りの良さ、それはとてもいい匂いがしていて同じシャンプーやリンスを使っているのが嘘のようだった。

そこまで手の込んだ手入れはしていないはずなのだが、それでもこの髪の美しさは同じ女性として嫉妬せざるを得ない。

姉は年齢の割りに小柄で畳に横になっている姿は自分より年下に見える、というより明らかに年下だ。

薄手の服を着ているその肢体は余分な贅肉がまったく存在しないという女性にとって理想の体型。

お腹の辺りから微かに覗く肌を触ってみてもやはりすべすべしていて、とても良いさわり心地である。

だがそんな完璧な姉の体にも唯一の欠点が存在したのだ。

「・・・相変わらず平面だ」

妹はいつまで経っても成長の無い『それ』に涙した。

どこか幸せそうな表顔で眠る姉の顔は非常にコンパクトに整っていて、各部位が人形のように完璧なフォルムとなっていた。

しかしそれでいて目に付いてしまうのが彼女の左目、妹である彼女の前でも滅多に外されることは無い眼帯が左目を覆っている。

恐らくはこの年頃の女性には不相応な黒い無機質なその眼帯が姉の雰囲気の原因ではないだろうか。

容姿は人並み以上のものを持っている姉だが小柄な体躯とは不相応なほどに大人びた性格である。

それでいて子供のような幼いところもあってそんなところも姉の可愛いところだと妹は思っているのだ。

「ん・・・真弓？」

「わっ」

姉の睡眠は浅い。眠ったと思えばすぐに起きることもあるし、少しの物音でも目を覚ます。

だから妹は今もこうして音を立てないように姉の部屋に侵入、観察をしていたのだがそれでも敏感に気配を感じたらしい。

眼帯で覆われていない右の瞳が真っ直ぐに妹を見据えている。

一点の曇りも無い真っ黒な瞳、長いまつげがその凛々しさを際立たせている。

気付けば随分と姉に密着した体勢でいた妹は慌てて体を起こし、離れる。

妹が少し離れたのを確認すると姉もまたゆっくりと体を起こした。

「ちょっと呼んでみても返事がないから、部屋に入っちゃったんだ」

「そうだったの？ ごめんなさい、昨日は夜遅くまでお仕事だったから」

「疲れてるんだろ。親父達が到着したらあたしが呼んでやるから姉ちゃんはもう少し寝てろよ」

姉の【お仕事】という単語に妹は僅かに眉をひそめて反応した。姉がごく普通に【お仕事】の話をするのを妹は快くは思っていない。

だがそのことをあまり口にしようともしない、口にしてしまうことで姉との関係に何らかの軋轢が生じてしまうのは

妹にとって絶対に望まないことだからだ。姉妹の関係は良いことにこしたことはない。

「私も起きてるわ。それにもうお昼だし、父さんと明地さんの分のお昼ご飯も用意しないといけないわ」

「例の居候かあ、本当にいいのかよ姉ちゃん？ 男なんかこの家に居候させちゃってさ」

「父さんの決定だもの。私達がどうこう言えるものではないわ」



姉の話では数日前、父からの電話で急遽家に一人の男を居候させることが伝えられたという。

父の提案に対して娘達に拒否権は存在しない、それが天原家だった。

清纯潔白だがちょっと荒っぽい好青年らしいというのが現時点で姉妹が知る【明地直彦】のプロフィールだった（父からの情報である）。

それから姉が時折複雑な表情をするところを妹は何度が目にしている。少なくともそれに【明地直彦】は関係しているのだろう。

「風呂とか覗かれたら嫌だな」

「確かに男の人と一緒に暮らすのはちょっとドキドキするわね・・・」

「だろ？ 野郎のパンツとかも洗濯しなくちゃいけないんだぜ」

父は一年をほぼ都会で生活しているので家に帰ってくるのは年に数回くらいだ。

帰ってきたと思えば着替えもせずに仕事に戻ったりしているので結果的に男物の下着に触れることも少なかったのだ。

「きつと臭いぞ。考えただけでも吐き気がする・・・おえつ。」

妹は心底嫌そうに顔をしかめる。清潔そうな人だから大丈夫よ、と姉は苦笑いしながらやんわりとこの場にいない直彦のフォローをした。

洗濯もそうだが、今まで姉と妹の二人暮しだった空間にいきなり異分子である男が侵入してくることにより

姉との充実した生活がどこか崩れてきてしまうような不安が妹にはあった。

「そいつも、仕事関係なのか」

「え？ どうしてそう思うの」

「親父が誰かを連れてくるって滅多に無いぜ？ しかも結構なお気に入りに入りらしいじゃんか。」

あの親父が気に入った奴なんて多聞のおっちゃんくらいしか知らないし」

「ふふ、父さんは変わった人だからね」

姉は苦笑した。それに妹も一緒に変な父親を思い出して苦笑する。

「親父は居候のことを何て言ってたんだ？」

「普通だけど普通じゃないって、相変わらずよくわからないけどね」

父がややこしい言葉遊びが好きだということも娘達は理解していた。

一緒にいた時間が親子として長いのか短いのかどうかは別としてよく親を観察しているということだろう。

父は他人を悩ませたり言葉で屈服させるのを特に好んでいるのももちろん姉妹はわかっているし、

自分達が標的にされた場合の回避方法も編み出していたのだ。

「ここに着く前にノイローゼになってるんじゃないかな、居候」

「そうになってないことを祈るわ。一番の回避方法だって私達くらいしかまともに出来ないもの」

回避する方法と言っても単純に無視するだけのことである。

存在すら無視されてはどんなに弁が立つものでもそれは意味の無いものになってしまう。

それと同時に父は年頃の娘二人に無視されてしまうという苦痛も二重に味わうことになるのだ。

その時ばかりはあの嫌味な笑い方をする父親も悔しげに黙りこむしかない。これは肉親である姉妹だからこそ出来るもので、

他人がやろうものなら社会的に抹殺されてしまうかもしれない。腐っても彼女達の父はそれ相応の社会的地位を持っている人物なのだから。

部屋での雑談を切り上げて姉妹は台所へ。前もって多めに買っておいた食材を使つての昼食を作るのだ。

居候のささやかな歓迎会のようなものも含めているため夕食は彼女達にしては奮発した方だろう、高い肉などが冷蔵庫の中には入っている。

保護者である父が上流階級の人間だからといって娘の姉妹もまた豪勢な生活を送っているわけではない。

父はあえて多くもなく少なくもない額の生活費を毎月送っている、それにどんな意図があるかは姉妹にもわからなかったが、

姉が家計簿をつけて日々細々と生活を続けている。

豊かでもなく貧しくもないという中途半端な家計だが特にこれといった不満もなかった。

「それにしても我が家で焼肉なんてひさしぶりだな。肉なんて最近口にしてないし」

さっそく包丁で昼食の具材を手馴れた手付きで切り刻む妹。

口笛も口ずさみつつその速さは中々のものだ。

みるみるうちにサンドウィッチ用の野菜やハムがパンに挟むにはちょうどいいサイズになっていくではないか。

「そ、そうね。・・・よっ、ほっ、あれ」

「おいー、またかよ」

何をどうやったらそうなったのか姉は無残に破裂したトマトの汁で手をベトベトにしていた。

それを呆れたように見つめる妹の視線に、姉の顔はみるみるトマト

のように真っ赤になっていった。

その顔のまま辺りに散乱してしまったトマトの破片を片付ける。

「姉ちゃんは本当に不器用だなあ」

もたもたしている姉を見かねて妹も片付けに加わる。

すでに自分の分の具材は切り終わったようで、

少し大きめの皿に並べられた具材はどれもちょうどいい大きさに綺麗に切り揃えられている。

一方の姉はというと最初のトマトの時点で躓いてしまい、まったく具材を切ることができていなかった。

「手が滑っただけだもん」

姉としての威厳を保つための言い訳も彼女の『不器用さ』をよく知っている妹には無意味だ。

「トマトは手が滑っただけじゃ爆発しないから。ここはあたしに任せて姉ちゃん皿とか飲み物の用意をしてくれよ」

「うっ」

そんな風に邪険に扱うと決まって姉はしょんぼりと子供のようにいじけてしまうのだった。

反論しようにも自分自身のことは本人が一番よくわかっているわけで、自分が反論できる立場でないことは重々承知していた。

それにしても、と妹は姉の不器用さについて考える。

姉はしっかりとした女性で決してドジなわけではないし、ましてはただの阿呆ではない。

かといって天然とも少し違っていて、そうなると普段の破滅的な不器用さの説明がつかない。本人曰く眼帯をつけているから、らしい。

片目だけで生活しているから平衡感覚が少しおかしい、というのは父の説である。

普段の姉の行動からはそのような不自然さは感じられないが、今のところそれ以外まともな答えを妹は出すことが出来ないでいた。

姉がどんな存在であれ、妹にとって特に問題は無いのだったが。

肩を落として食器の入っている戸棚へ姉が歩いていったことを足音で確認した妹はそのまま残った具材を切るために包丁を手に持った。

一応姉に声をかけておく。

「姉ちゃん、皿はしっかり持てよ？間違って落としたりしないようにな」

「真弓は心配性ね、お皿を運ぶくらい私にだって」

「今何枚持っている？」

「え、十枚よ。おっと・・・」

「そんなにいらねえ！何枚か減らさないと・・・」

言い終わる前に妹の耳には『皿が床に落ちて碎け散る音』の残響が聞こえていた。

予想通りの事態に慌てて後ろを振り向くと、もうなんとも言えないような顔をした姉が呆然と突っ立っていて、

妹としては割れた皿よりもプライドが完全に崩壊したように見える姉の方が心配だった。



「真弓」

「ん」

「これは私のプライドよ、たぶん・・・」

床に散乱した皿を指差した。

他人と雰囲気が違うのはこのせいなのかもしれない。ただドジなだけなのだろうか。

## 第1章「要塞村」：5

「そんなこと言ってないで片付けようぜ。箒と塵取り持ってきてよ」

「ん、わかった……。ごめんね真」

妹は何も言わずに姉に指示を出した。また可哀相なくらいに落ち込みながら姉は目的の箒と塵取りのある玄関へと、

肩を落しながら歩いていった。躓いて転ばなければいいが、と心配をする妹は自分の作業を中断して

見事に十枚全部が割れてしまっている皿の方へ体を向ける。しゃがみこんで出来るだけ欠片を一箇所に集めるのだ。

細かい破片は一通り片付けを合った後に掃除機で吸えばなんとかなるだろう。

指を切らないようにそつと真つ白な破片を摘み上げる。

妹にとってこんなことは珍しいことでもなく、彼女自身はいたって冷静である。

そして姉はという度重なる失敗のせいで自分自身が嫌になってきているようである。姉はテンションの変動が極端なのだ。

「・・・持ってきたよ」

「おーし、それじゃあさっさと終わらせようぜ」

「うん」

そんな姉の心境を理解しているのだろう、妹は特に何も言わずに彼女の失敗をフォローする。

たった一人の姉なのだから妹の自分が助けるのは当たり前、そういつた考えで彼女は行動するのだ。

それに失敗して落ち込んでいる姉はどこか性格が幼くなっていて、そんな姉もまた非常に可愛いという妹として微妙なことも内心では思っていたりするのだった。

「本当にごめんなさい真弓。ダメな姉で・・・」

「今更だなあ。でも姉ちゃんが完璧だったらそれはそれで嫌だけだな。」

完璧すぎたら、あたしの出番が無くなるだろ？ 姉妹なんだからやっぱりお互いに助け合っていきたいじゃないか」

「うっ、真弓は優しいね。私は幸せ者だわ」

「べ、別に」

妹の言葉に姉は心底嬉しそうに微笑んでいる。

その妹は妹で言うてからどこか恥ずかしくなって顔を俯けたまま黙々と破片を集めることにした。わざと素っ気無い返事をして照れ隠

しだ。

人は欠点があるからこそお互いに助け合う喜びを知ることができるのではないか、お互いを補い、

支え合って生きていく幸せというのは一般的菜『結婚』のイメージに近いかもしれない。

もし姉が完璧な人間だったら妹は自分の存在に自信を無くしてしまうかもしれない、一切頼られること無くただ助けられるというのはやはり気分の良いものではないのだから。

その点から言えば妹は父が苦手であつた。父は常識的に見て『変な部分』を除けば間違いなく完璧な人間だからである。

若々しい容姿は見せかけではなく、運動神経抜群で体力はそこらのスポーツマンと同等以上だろう。

その他の部分は彼の経歴を見れば説明する必要も無く、こんな父親だから娘である妹は尊敬の念よりも劣等感を感じてしまうのだ。

姉は特に気にしていないようだが、父は娘である自分達にこれといった期待をしていないのも妹は知っている。

それが娘達に過度なプレッシャーを与えないためなのか、それとも本当にどうでもいいと思っているか、

どちらが正しいか断言することはできない。親である父の『変な部分』が彼女との唯一の繋がりなのかもしれない。

少なくとも妹は頻繁にそう思うようになっていた。そんな不安を姉に相談するべきなのか未だに決めかねている。

それ以前に妹は姉に対して言いたいことや相談したいことなどをどこかで後回しにしている節があつて、

やはりそれは現状維持を優先したい気持ちからくるものなのだろう。

「ねえ、真弓。お昼が出来上がったら父さん達を迎えにいきましょうよ」

「あのなあ姉ちゃん。まずは割れた皿を片付けてからにしようぜ。それに何でわざわざ迎えになんて行く必要があるんだよ」

「ピクニックみたいで楽しそうじゃない。明地さんと親睦を深めるのにももってこいね」

「親睦、か」

持ってきた掃除機で残った細かい破片を吸い始める。

比較的大きな音を立てながら、掃除機は本当に細かい皿の破片をぐんぐん吸っていく。音に関しては古い型なので仕方が無い。

それよりも妹は妙に居候を気にかける姉がどうにも不自然な気がしてならなかった。

「その明地ってさ。姉ちゃんとか関係あるのか」

今の現状を維持したいという反面、自分の知らない姉の何かを知りたいという好奇心がその問いを口に出させてしまった。

つてから口を紡いでもすでに遅く、その問いは姉の耳に届いていることだろう。

「え？ 今何が言ったかしら」

「・・・いんや、なんでもない」

しかしボーっとしていたのか、運良く姉は問いを聞き逃していた。掃除機の騒音もまた妹の声を妨げていたようである。

そこもまた姉らしいと思いつつ内心で胸を撫で下ろしながら妹は掃除機の電源スイッチをオフにしていた。

「ピクニクだってんなら、座るためのシートも必要だな、確か掃除機をしまっていた倉庫に入ってたような気がするんだけどな」

「そうだねえ、真弓もなんだかんだで結構ノリノリじゃない」

「そんなに目を輝かせて提案されたら断れないよ」

小学生のように純粹無垢な光が彼女の瞳の奥にあって、それを見てもしまつと姉には深い悩みだと無いのではと妹は思ってしまったりする。

「じゃあ姉ちゃんはシートとか、必要なものを準備してくれ」

「わかったわ。真弓はサンドウィッチをお願いね」

姉は頷くと掃除機を両手で持ち、そのまま倉庫へと小走りで駆けていった。倉庫といっても家の中にある物置のようなものだ。

姉のピクニックに賛成して、妹は昼食のサンドウィッチを仕上げるために台所に向き直った。

具材はすでに切り終わっているのでは後はそれをパンに挟めば完成である。すでに食パンも耳を切り離してあり、

それほど時間もかからずに作業は終わりそうである

姉妹はそれほど多い量は食べないものの、男二人がそれに加わることを考えれば自然とサンドウィッチの数も増えてくる。

余った余ったで夜食用に保存すればいいだけのことだ。

「（それにしてもピクニックか・・・、姉ちゃんも能天気だよな）」

倉庫の方では姉が必死に目的のものを探しているらしく、ガサゴソと大きな物音が聞こえている。

妹はその音を聞きながらひたすら具材をパンに挟んでいた。

不思議とその時は何も考えず無心の状態だったのは、後で気付いたことである。

\*

要塞百済村、仰々しい名前とは裏腹に見た限りではいたって普通の山村というのが直彦の感想だった。

村を一望できる高台で休憩を取っていた直彦と天原、天原に勧められて百済村を見渡してはみるがどこを見ても普通。

砲台や戦闘兵器などがあるでもなく、部隊が配備されているわけでもない。

確かに少しだけ山村に相応しくないコンビニや大きいホールらしき建物もあったが、

それらが要塞と呼ばれている理由に関係しているとは思えなかった。

「意外と普通なんですね、百済村は」

率直に感想を述べる。失礼かとも思ったが、それにより返ってくる天原の答えを期待したのだ。

「普通なんだな、これがさあ。最近やっとコンビニが出来たんだぞ？

学校だって小学生から高校生まで同じ教室で授業してる有り様だし、これぞまさにド田舎だな」

「では何故『要塞』などという呼び方をしたのですか。こんなところに配属とは、やはり社長は私に殴られたことを根に持って・・・」

「オホン、この天原刀伍がそんなに小さい男か。

言っておくがこの村は日本でも屈指の激戦地の一つなのだ。まさ



に君が戦うにもってこい戦場だ」

口ではああ言っているがどうにも腑に落ちない直彦だった。

これは左遷ではないか、こんな辺境の地で自分を飼い殺しにする気ではないだろうか、と直彦は若干不安になる。。

「百済村は確かに何も無い村だ。だがここは私の故郷で、今でもこの高台から見る景色は最高だと思う」

そこには人々が生活を営む小さな空間があつて、それらを囲むように水田が広がっていて、さらにその周りには広大な自然があつた。

都会ではまず目にすることはできない眺めが直彦の目には鮮明に映っている。

「・・・」

「いいか明地くん。愚かな英雄的思考は捨てろ、自分の発言を撤回するようだが、

一人で日本国を守るなんて空想のヒーローだって難しいんだ、きつと。

今はこの村を、そして私の娘を守ることを考えてこの任務に就いてほしいのだ」

この天原刀伍のようなタイプの人間と出会うのは間違いなく直彦は初めてだった。

人を馬鹿にしたような態度を取っていると思えば、突然難しい哲学的な質問をし、そして今度は真剣に自分の故郷を守れと言う、

直彦は真剣な面持ちでじつと村を見つめ続ける天原の横顔を見る。

彼が自分の娘を戦場に、戦いに出しているということも事実で、直彦のにとってこの男が善なのか悪なのか、

その境界線は曖昧になっていた。だがそれを含めてこれから見極めていこうというのが直彦の答えで、彼は天原を見ながら、宣言する。

「最初から私はそのつもりでG Hの操縦主に志願しました、だからあなたの言うとおりこの村は私が守ってみせます

・・・そしてあなたの娘、シホリさんのことも」

どこか娘との婚約を報告してきたような台詞にも聞こえるが、『信念』は意外にも簡単に固まった。

だが直彦にとってはこれでよく、『信念』よりも『目的』が出来たということが重要なのだ。

「フフ、ごく普通の答えだが、その言葉が聞きたかった。さあ、行こうか。我が家に」

満足げに答えると天原は腰掛けていた岩から立ち上がった。

残りの下り道を歩き始めた天原だったが、ふと後ろを振り返ってみると直彦はまだ高台からどこか決意のようなものを抱いた顔で

百済村を見下ろしていた。

## 第1章「要塞村」：6

\*

姉の持ってきたバスケットにサンドウィッチを詰め込んだ妹は、一度自室に戻った

今日は朝起きてから部屋着用のジャージを着ていたのだが、姉がどうしても着替えると言うので渋々外出用の服に着替えたのだ

「真弓ったらまたそんな男の子みたいな服着てえ、たまにはスカートも穿いてみたらどう？」

「冗談言つなよ。あたしにスカートなんか似合うもんか」

姉はというと明るいピンクのロングスカートをすっかり穿いていた。

元々の小柄な容姿や流れるように流麗で美しい黒髪も相成って非常に似合っている。

やはり眼帯がそれを台無しにしていたが、それを差し引いても姉が可憐な少女だということに変わりはないのは間違いない。

「真弓はスタイル良いんだから、女の子っぽい服でも似合うと思うわ。スレンダーで羨ましいわね」

「自分じゃよくわかんないよ」

そう言う姉の顔は本当に羨ましそうであり、必死に妹の横でびよこ

ぴよこと跳ねている。

二人で横に並んでみると身長之差が顕著に表れてきていた。

姉としては妹のような体型に憧れ、逆に妹はその体型を少しばかり疎ましくも思っていたのだった。

一般女性に比べて身長が高く無駄な贅肉の無い引き締まった体は友人から羨望の眼差しで見られる、

しかし本人は姉と同じような小柄な体型に密かに憧れていたのだ。

だが、大抵それを口にするに嫌味つたらしく聞こえるのが悲しいところである。

「ほらほら、あんまり飛んだり跳ねたりしているとまた転んじゃうぞ。そろそろ行こうぜ」

「うん。それじゃあ真弓がバスケットを持って・・・」

「ちょっと待った。それは姉ちゃんが持つんだ、別に重くも無いしな」

少し強引にバスケットを姉の手に押し付けると妹はシートや水筒など他のものを持ち始めた。

「でも」

「いいからいいから。他のはあたしに任せて」

玄関から姉を先に出させた妹はちらりとその姿を見る。

「・・・うん、似合ってる」

満足げにバスケットを両手で持つ姉の姿に頷いた。少しよたよたしているところが妹の中の何かをくすぐっている。

その何かは恐らく妹としていけないものなのだろう。

「やっぱり姉ちゃんは最高だ・・・。覚悟しろよ居候、姉ちゃんには指一本触れさせねえ」

改めて妹は姉を居候男の毒牙から守ることを心に誓った。

ろくでもない男から姉を守るというのが妹の隠された『信念』であったのだ。決意の炎を目に宿し、気合を入れる妹。

「ふふ、真弓ったらあんなにヨダレを垂らして・・・。きっとお腹が空いてるのね」

当の姉は見当違いなことを笑顔で喋るのだった。

「よっしゃ！ 行こうぜ。きっと親父のことだから高台の道から来るだろ」

「すれ違いにならないといいのだけど、少し走りましょうか？」

それを聞いて、にっと笑った妹は素早い動きでいきなり駆け出した。長い脚で走る姿はとも見栄えが良くつい見とれてしまう姉だった。

が、

自分が置いてけぼりにされてしまうことに気付いて妹の後を追うべく、走り出した。

だがロングスカートに加えて両手で持ったバスケットはやはり走る妨げとなり、結局走る速度は自然と落ちてしまう。

「も、もう見えなくなっちゃった。・・・まゆみい」

妹のことだから少し先で待っているかと思っていた姉だったが、いくら先に進めども妹の姿は見えてこない。

姉は知らなかった。居候がどんな男かを先に見極めるべく妹が気合を入れていたということ。

彼女は高台の道から降りてくるであろう父と居候の明地直彦に会うべく、全速力で駆けていつてしまったのだ。

「せっかちなんだから・・・。そんなに父さんと会うのが楽しみなのかしら。それとも居候さんかしらね」

結果的に取り残された姉はゆっくりと妹が走り抜けた道を歩いていくことにする。

長い間この百済村で暮らしてきただけあって殆どの道は歩いたことがある。周りの風景も見慣れたものだった。

休日の日曜日だというのに珍しく外には人の姿が見えず、誰もいない道を姉はマイペースに歩いていく。

そこでふと後ろから何かを気配を感じて振り返った。

「あら」

「おっと、見つかってしまった」

そこにいたのは不審者ではなく姉がよく見知った人物だった。

「こんにちは多聞さん、お店の方はいいんですか？」

「いいのですいいのです、どうせ客なんて滅多に來ないから。」

それよりシホりお嬢さんがおめかしをして歩いているのを見かけたものだから、

これは男として尾行するしかないだろうと思ひましてね」

安物の和服をだらしなく着たこの男は百濟村で唯一の本屋を営む大善寺多聞だ。

姉妹の父親、天原刀伍とは結構長い付き合いらしく娘である彼女達との親交もあった。

特に姉は趣味が読書ということもあってちよくちよく彼の店に足を運んでいたのだ。

「これから父を迎えに行くんです。あと一緒に来る居候さんの歓迎も兼ねて外でお昼を、と思ひまして」



サンドウィッチの詰まったバスケットを軽く掲げてみせた。

「ほほう、刀伍さん帰ってくるんですね。それに居候さん、・・・これは面白そうだ」

そう言つと大善寺はわざと黙りこくつてチラリと姉を見つめた。

下心丸見えの視線に姉は気づいているのかわからないが、大善寺が予想したようなことを口にする。

「よろしければ一緒に如何ですか？ サンドウィッチも少し多めに作りすぎちゃったし・・・」

「是非！」

嬉しそうに拳を握り締め、それじゃあバスケットは僕が持ちますよお と張り切った様子で大善寺は姉の手からバスケットを受け取った。

傍目から見ても彼のテンションの上昇具合がわかる。前々から姉に対して好意を抱いているのも関係しているのだろう。

「それにしてもあの刀伍さんが人を連れてくるなんて珍しいですな」

刀伍とは長い付き合いというだけあって彼がどういう人間か、大善寺はよく理解していることは姉も知っていた。

それと同時に刀伍が対等な付き合いをしている数少ない人間もまた彼だ。

父はどうやら変わった人間が好きなのだ、しかも極端に変な、というのが姉の感想である。

「どうしましたお嬢さん。そんな変人でも見るかのような目で私を見つめて。」

・・・待てよ？ 変人というよりは暇人でしょうかね。いや、暇人を超越した真なる暇人かな」

そんなことを真面目な顔で言っつて、真剣に頭を傾げる彼も立派な父の同類なのだろう。

大善寺は本屋を営んでいながら日々の生活に退屈している暇人である。自分自身もそれを自覚してこのように話のネタにしているし、

村人もそれを知っている。まさに自他ともに認める暇人がこの男なのだ。暇を潰すために村を徘徊するのも日常茶飯事で、

この前は学校で臨時の国語教師をしていたこともあったのだ。

「つまり真暇人です」

「はあ」

「ふふふ」

父の友人ということで彼も独特の話し方というか『ノリ』を持っていて正直姉はこの男にあまり付いていけない。

妹なら男勝りな性格もあり彼の『ぼけ』に『つつこみ』を入れると

いう漫才じみたこともできるのだろうか。

無下にあしらうのも姉の心情としては気が引けるので適当な相槌を打つのがお決まりだ。

「あ、そうだわ大善寺さん。この前私が読んでいた『マスタツシユ大尉の手記』ですけど」

「『マスカット大樹の集金』？」

「・・・」

「あー、嘘です嘘です！ 怒らないで、ちゃんとキープしてます」

姉が少しムツとした表情をしたので大善寺は焦ったように反応した。彼にとって焦るのはまた別の理由もあるのだが、姉の表情が元に戻ったのを確認して安堵したようだった。

「お嬢さんになら恋愛小説をオススメしたいところなんですけどね。都会の方で大ブームになっている作品を何冊か仕入れたのです」

「恋愛小説」

「ええ、例えばですね・・・」

大善寺は特に人気のあるという作品をあらすじを丁寧に語ってくれた。書籍に関する記憶力はさすが本屋というだけあってか、

なかなかのものを持っている大善寺だった。

語られた内容は年頃の乙女ならうつとりするような甘酸っぱい男  
女の恋愛の話だったが、

姉はそれを聞いてどこか安っぽいと感じ、安易なハッピーエンドか  
バッドエンドを想像した。

「どうでしょうか、お嬢さん」

「どうでしょうかと言われても・・・生憎私はそういったジャンル  
は苦手というか・・・」

「いやいや！ そう言わずに。実はちょうどその一冊が私の懐に入  
っていたんですなあ。」

ささつ、遠慮せずにどうぞ受け取ってくださいな」

大善寺の懐から出てきたのは薄いピンク色のカバーの文庫本だった。

「お金はいりません。ささやかなプレゼントです」

困った顔の姉とは対照的に笑顔の大善寺はその本を姉に渡せて満足  
といった感じである。

本の表紙にはカタカナで『トゥルー・ラブ』とあった、タイトル  
なのだろう。何から何まで安っぽい。

「あ、ありがとうございます。ゆっくり読みますね」

「ははは、お礼もいりませんって」

つき返すわけにもいかないので礼を言って文庫本をスカートのポケットに入れる。

文庫本は小さいものだったのでポケットにもすっぽりと収まった。

果たしてこの作品をちゃんと読む機会は訪れるのだろうか、感想などを聞かれた場合を考えればやはり読んでおいた方がいいのか、姉は悩んだ。悩んで、人の好意に対してあれこれと無駄に考えを巡らせる自分に対しての嫌悪感が沸き上がってきた。

「お嬢さん、少し顔色が悪いですよ？　どうかしましたかね」

「いえ、なんでもありません。お腹が空いたのかもしれませんが・・・真弓が先に行って待っていると思うので急ぎましょうか」

「よろしければ私がおんぶか抱っこなどしてあげますよ」

「結構です」

「う。即答ですか・・・」

大善寺の申し出は軽く流したと同時に姉は自分に対する嫌悪感を何とか払拭させた。

完全に拭い去れたのかというところやはり微妙なところである。

数日前なのか数日後なのか。

天原シホリは必死に鬱な気分を打ち消すために努力していた。

恐らくは自分にとって唯一の心の拠り所である妹、真弓とのやり取りが今の彼女のプレッシャーを和らげている。

だからといって自分の悩みをすべて妹に打ち明けているわけではなく、やはりモヤモヤとした気持ちは残ってしまっているのだ。

「明地直彦」

まったく言っていないほどに赤の他人であるこの男が自分の命の行方を握ることになるであろうという

この事実、そのような男とどうやって接すればいいのかなど妹に相談できるはずもない。

妹自身、彼女の【お仕事】を毛嫌いしているところもあって極力その話題は出さないようにしている。

この数日、彼女は悶々とこれからのことを考えた。

もし明地直彦は愚かな英雄的思考の人物だった場合、操縦主として凡庸な人物だった場合、

その人物のタイプなど何億ものパターンがありいちいちそれに対する接し方を考えるなど馬鹿らしい話だが、

シホリにとってこれから長生きできるかどうかを左右する問題である。時間があればそれらを漠然と頭の中で考案しシミュレートする。

そこで暫定的ではあるがやはり明地直彦に対しては献身的に、女性的に接していくべきだというのが彼女の今の答えだった。

「真弓・・・、こんな姉をあなたは軽蔑するかしら・・・」

例え自分の貞操が危ぶまれようと明地直彦が自分をより長く生かしてくれる人物ならば、そう考えるとシホリに迷いは無かった。

それが妹のために繋がると信じているから。

シホリの世界は妹がすべてだった。自分の『味方』でいてくれる少女、血の繋がりの無い妹。

そんな彼女はシホリを慕い、支えてくれる。それにシホリは安心して妹に依存する。

だが心のどこかでそれが正しいことなのか疑問を投げかける自分がいた。

しかし彼女の世界は妹を中心に回っていた、回らざるを得なかった。シホリはそれ以外のものすべてが信用できない人間なのだから。

何もかもが偽りで、自分に敵意を向けていると思っていた。

「そうよね、私は歪んだ人間だから・・・」

そんな彼女に父は戦うことを強要し、シホリもそれを承諾した。

すべては妹のためなのだ。

百済村が敵に狙われることは聞かされていたし、現在の主戦力ではそれに対抗できないことも理解していた。

それ以前に父はそのため彼女を養子にしたのだ。自らの左目がその証拠であると同時に絶対に逃れられない鎖。

そしてあの【巨人】と【大砲】を間近で見た時の震えが今もシホリの体には残っている。あの圧倒的な威圧感に心の底から恐怖した。

「あ」

頭の中がすでに軽い混乱状態である今でも、眼帯で塞がれていない右目で見る夜の月は綺麗だった。

そんな中シホリは虚ろな光を片目に宿しながら自分の目の前に立つ男を見上げていた。



## 第2章「紫電」：1

高台から降りてくると短い草が生え揃っている野原に出ることができた。

村はこの野原を越えた先にあると天原が言う。

それを聞いて長かった三日間の過酷な行程が終了したのだと、直彦はホッと胸を撫で下ろした。

一歩間違えば餓死していたか遭難していたかもしれないという危険なものであったが、

目的地に到着してしまえばそんなものは笑い話なることだろう。

この辺りの自然はさすがに環境汚染の影響はほとんどなく、こんな状態でなければゆっくりと見て回りたいものである。

「この三日間は社長が言うには試験でしたね。本当に一時はどうなるかと思いました」

「これくらいの山越えで死んでもらっては困るからな。

あと君とはじっくりと話をしてみたかったのもあるが、ともかく試験は合格だ」

「私はこのまま社長のご実家に厄介になるわけですが」

「どうした」

「年頃の娘さん二人だけ、そんなところに私みたいな男を放り込んでよいのですか」

「おいおい、すでに娘に手を出す気満々なのか君は」

苦笑と若干の不快感を露にした顔で直彦の顔を見る。

もちろんそんな気など直彦には毛頭無いのだが若い女性と一つ屋根の下で暮らすということが直彦にはどうにも抵抗があつたのだ。

「そうじゃありませんよ！ それは話が飛躍しすぎです社長」

「フン、君の居候に娘達もそこまで嫌がつているわけでもないから気にするなよ。」

どうしても性欲を持て余すのならちゃんと段階を踏んで手を出して貰いたいものだがな」

あくまで直彦を茶化す姿勢は崩さずさりりとなんことを言っているまう天原。

彼の言うことを信じるなら姉妹とはそれなりに良好な関係を築けそうである、直彦は一先ずその話題からは離れることとした。

「しっかりした娘達だからその辺はきっちりしているよ、だから二人暮しなどさせているし、戦場にだって出すことができる」

天原は意識しているのだろうか、随分と直彦の痛いところを付いてくる。

そういう性分なのだろうか。あまり話したくない話題を出されて思わず閉口してしまう。

直彦が何も話せないでいるのをまた面白そうに天原は見つめているのだ。どうも三日前から相手のペースに乗せられているようである。すでに彼は分析を完了させているのだろう、わかっているも特にとぅすればいいかなど凡人である直彦に考え付くはずもなく、

聞かぬふりをするのが精一杯なのだった。

「あ」

「ん？」

ふと天原が立ち止まり、顔の向きを前方に戻し目を細くする。

それにつられて直彦も前方を見ると、というよりすでに『それは彼らの目の前にやってきていた。』

もちろん地面を足で駆けて来たのだろうが、それはまさに俊足と言うに相応しい。

モデルのような体型をした見目麗しい少女がそこにはいた。だが少し釣り上がった眉と鋭い眼光が天原と直彦を交互に見据えている。

「相変わらず猪みたいに速いなお前は。男も作らずに野山を駆け回っているのか、元気そうだなによりだ」

「うるせーよ、年頃の娘にイノシシはねえだろう」

「私なりの愛情表現ではないか、いい加減慣れるのだ。それともあれか、抱擁がいいか？ ハグして欲しいか」

「塩分の摂りすぎで死ね！」

「口が悪いのも変わっていないか。それでお姉ちゃんはどうした」

「すぐに来るよ。それよりもそいつかよ、居候つてのは」

わざわざ天原に聞くまでもなく、この二人の会話から関係を察することはできた、

直彦もそこまで頭の中がお花畑ではない（疲労によって僅かだが頭の回転が遅くはなっていたが）。

だが彼女から妙にきつい視線を受けているのは気のせいではないようだ。

目の前の少女は直彦を睨んでいる、しかも明らかに敵意を向けている。その視線に戸惑いながらも直彦は挨拶するべく口を開いた。

「こんにちは、もしかして君が天原真弓さん？」

「ふん、そういうお前は明地直彦だな。アホの親父からいろいろと聞いているよ」

「僕も少しだけ君達姉妹のことは聞かせてもらったよ。」

えーっと改めまして、明地直彦と申します、これからお世話になるのでよろしくお願いします」

「ふうん、本当に『普通』 そうなやつだな」

横で天原がそうだろうと何度も首を縦に振っている。

初対面にも関わらず、ずけずけと物を言うところがどこか父である天原に似ている。

よくよく見ればそのモデルのようにスレンダーな体型も父親の遺伝のように感じた。天原もスレンダーではないが、

バランス良く全身が引き締まっていてスマートな体躯の持ち主だからだ

「普通そんな人は嫌いかな？」

「いや、逆にそっちの方がいろいろやりやすい。さすがに変なことしなけりゃ追い出したりはしないから安心しなよ」

何がやりやすいのかはあえて問い質そうとは思わなかった。

「それで、何故にお前はこんなところにいるのだ。

お前のような娘っ子がお出迎えなんて柄でもないだろうに、シホりなら話は別なのだな」

「いちいち煩い親父だな。おっしやるとおり姉ちゃんの提案で居候のお出迎えさ。ちなみにわざわざ昼食持参でな」

「僕のお出迎えなんてなんだか悪いなあ」

嬉しそうに頬を緩める直彦、姉妹の気遣いが素直に嬉しいのだ。

だが天原真弓は視線を直彦から外そうとはせず、さらに直彦を値踏みするかの如く上から下へと目を動かす。

「それであたしは先に居候のあんた、明地直彦がどんな奴か確かめに來たつてわけ」

どうも自分はあまり歓迎されてはいないことに、やはり不安になる直彦。

胃が痛くなるような展開は勘弁したいところである

「彼はなかなか見所のある男だよ、シホリの相手にちょうどいいと思うぞ」

「あん？」

何も考えていないようなことを言う天原に対して真弓の動きは素早かった。

大腿で足を振り下ろし、天原の足を思い切り踏み付ける。彼は頑丈な登山用のアウトドアシューズを履いているのだが、

真弓のそれはその頑丈さを上回る威力の踏み付けだったようだ。何かが潰されるような音が聞こえたのは気のせいだろうか。

「ぐあ！」

能面のような顔がたちまち崩れ、踏まれた足を庇うように飛び跳ねる。

直彦に顔面を思い切り殴られても大して痛そうな反応を見せなかったこの男がこれほど痛がるのだから、

想像を絶するほどの威力なのだろう。

「うわあ、社長……」

「姉ちゃんにこんな奴は合わないよ。あんまり変なことというと本気で怒るぜ親父イ」

「フ、フフン、これだからシスターコンプレックスは困るのだ！そろそろ姉離れをしろ！」

その瞬間真弓の両目がくわっと見開かれ、天原は背負っていたサックを投げ捨てその場から退避するかのように野原を駆けた。

呆然とその光景を見ながら、初めてといっても数日前に会ったばかりなのだが。

直彦は天原の悲鳴を初めて聞くことになった。意外と普通の人間と変わらないものだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0215f/>

---

CULTURE-HAMMER

2011年1月28日02時45分発行